
幽遊白書～刹那の炎～

コーンマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽遊白書〜刹那の炎〜

【Nコード】

N7419A

【作者名】

コーンマン

【あらすじ】

幽遊白書の勝手な続編です。かなり好みが出ますがあしからず。てか評価されねえ！評価してくださいm(_____)m文句でもいいから

1・審判の門（前書き）

この小説を読んで…誰もが同じコトを思っでしょ…

1・審判の門

仙水との闘い…そして魔界統一トーナメントより2年後…

霊界

全ての生と死を司る世界

…コツ…コツ…

霊界の中枢・審判の門へと歩くひとつの影があった

門番鬼 A

「なに用か」

門番鬼 B

「現在審判の門は解放されておらぬ。火急の用事ならば我等が聞こ
う」

????

「…」

門番鬼 A

「用件が無ければ去るがよい」

????

「…コエンマを出せ」

門番鬼 B

「…コエンマ様は現在会議中である。出直すが良い」

????

「いいからコエンマに取りつげ!」

男は少しイラついた様子だ

門番鬼B

「…よ、よかるう…お主の名は?」

男の尋常でない妖気に門番は気付いていた

????

「…飛影」

門番鬼B

「ひ、飛影だと?お主があのだ眼師・飛影か!…おい!」

門番鬼A

「あ?ああ!」

そう言う門番鬼のひとり審判の門へと消えて行った

飛影

「ちっ…トロくさいヤツらだ」

門番鬼B

「しばし待たれよ」

数分後…先程の門番が帰ってきた

門番鬼 A

「飛影殿！失礼いたしました！コエンマ様が自室にてお待ちです。どうぞお入り下さい」

門番鬼 B

「開門！！」

…ゴゴゴゴ…

門番が叫ぶと巨大な審判の門が徐々に開いてゆく

飛影

「…ふん」

…コツ…コツ

飛影は不機嫌そうな顔で門へと消えていった

門番鬼 B

「あれが有名な邪眼師・飛影か…」

門番鬼 A

「うむ…広大な魔界でもその名は浸透しているらしいが…」

門番鬼 B

「しかしS級妖怪が霊界に…それもコエンマ様に何用なのか…」

門番鬼 A

「…それがどうやらコエンマ様が飛影を呼び出したようなのだ」

門番鬼 B

「コエンマ様が？妖怪関連のトラブルならば浦飯幽助が居るではないか」

門番鬼A

「うむ…全くコエンマ様は何をお考えなのか…」

1・審判の門（後書き）

ね？思ったでしょ？「会話が多い」って（笑）

2・『食事』（前書き）

あいかわらず会話しかねえ！

2・『食事』

コエンマ自室

ガチャッ

コエンマ

「来たか」

飛影

「…」

部屋にはコエンマが座っている

コエンマ

「まあ座れ」

飛影

「なんの用だ」

コエンマ

「…うむ」

飛影

「妖怪関係の事件なら幽助を当たれ」

コエンマ

「…妖怪関連ではあるが…ワシがわざわざ飛影…お前を呼び出した
のには理由がある」

飛影

「さっさと言え」

コエンマ

「実はな…最近妖怪による『食事』が霊界・人間界問わず多発しておる」

飛影

「…」

コエンマ

「ワシの側近がな…妖怪の姿を見たのだ…」

飛影

「何が言いたい？」

コエンマ

「その妖怪は…長い銀髪に氷のような冷たい目をした妖狐らしいのだ」

飛影

「…！」

コエンマ

「霊界では魔界以外での妖怪による『食事』を禁じている。それが魔界・霊界の唯一の条約だ」

飛影

「蔵馬はニンゲンを喰らうタイプの妖怪じゃない」

コエンマ

「んなコトは百も承知じゃ！しかし霊界は完全に蔵馬をマークしておる」

飛影

「ちっ！…それで俺にどうしろと言っんだ」

コエンマ

「うむ。飛影、お前には魔界から事の真相を探って欲しい」

飛影

「…ちっ」

コエンマ

「すでに幽助は人間界から調べている。これ以上の被害が出るようなら特防隊に要請がかかるやもしれん」

飛影

「蔵馬を狩る気か？」

コエンマ

「ワシだって蔵馬が犯人だなどと思っておらん！しかしワシひとりの力では霊界の全てを抑えるコトはできんだ…飛影、時間はないぞ」

飛影

「……クソが」

ダッ！！

飛影は審判の門を飛び出し、魔界を目指した…

コエンマ

「…蔵馬…」

2・『食事』（後書き）

会話小説しか書けません！（笑）

3 人間界（前書き）

やっと幽助登場（笑）

3・人間界

人間界

幽助

「こんな調子で真犯人なんて見つかるのかよ」

ぼたん

「うるさいねー。黙って妖気探りな」

飛影がコエンマに呼び出される数時間前、幽助もぼたんに『食事』事件について説明されていた。そして今は蔵馬の無実を証明するため、人間界で『食事』が行われるのを待っていた。

幽助

「へいへい。まったく…蔵馬もめんどくせーコトに巻き込まれたもんだ」

愚痴をこぼしつつも幽助は蔵馬を信じ、邪悪な妖気を探り始めた。
ぼたん

「そうだね…。」

二人はさらに集中していく…と

???

「浦飯いーッ」

汚い声が響く

幽助

「桑原！」

ぼたん

「蔵馬は？」

桑原

「ダメだ！蔵馬のヤローここ一週間家にや帰ってねえみてーだ。母ちゃんも心配してたぜ」

幽助が事件を聞いてすぐ、桑原も捜査に加わっていた。

ぼたん

「…そうかい」

桑原

「俺あ蔵馬の高校に行ってくるぜ！あそこには海藤がいるしな」

海藤というのは仙水事件の時の仲間であり『禁句』の能力を持つ蔵馬の同級生である。

幽助

「ああ、頼む」

桑原

「任せとけ。浦飯！オメーはしっかり真犯人見つけやがれ」

そう言い去る桑原

ピリリリリ

幽助・ぼたん

「!？」

ピリリリリ

ぼたん

「霊界テレビだね」

幽助

「コエンマか！」

霊界テレビを開くと案の定コエンマの姿

コエンマ

「幽助。たった今飛影が捜査に加わったぞ」

幽助

「飛影が?…そうか、アイツも蔵馬の事になると動くしかねーもんな」

コエンマ

「うむ！飛影には魔界側から調査してもらおう。お前は引き続き人間界の調査、及び蔵馬の所在を明らかにしてくれ」

幽助

「ああ」

ぼたん

「……この妖気は…幽助！」

幽助

「……ッ……出やがったな……行くぞぼたん！」

邪悪な妖気が満ちていく……

3・人間界（後書き）

ちよつとは会話以外の文章が増えたかな…

4・遭遇（前書き）

空腹で調子が出ません（・・・
――・・・
）

4・遭遇

ぼたん

「近いよ！現在地から2キロ地点」

幽助

「おっしゃア！先に行ってるぜ！」

ぼたん

「あ！幽助！」

すさまじいスピードで消えて行く幽助

ぼたん

「…速」

…一分程走ると

幽助

「…近い！なんて妖気だ…」

そのとき

女

「きゃあああああ！」

幽助

「！？あつちか！」

幽助は声のした方へ向かった

女

「イヤ…イヤあ！」

妖怪

「女…俺の血となり肉と化す事を誇りに思うがいい」

女

「は、放してえ！」

女は必死に逃げようとするが、その腕は妖怪に完全に捕えられている

妖怪

「さらばだ」

妖怪が女の頭めがけて口を開ける

女

「イヤあああああ…！！！」

…と

妖怪

「ム！？」

ズドオツ！

まさに女が喰われようとしたその時。特大霊丸が妖怪めがけ放たれた

妖怪

「チイツ！」

妖怪は女を投げ捨て、霊丸を避けようと宙に舞う

妖怪

「何者だ」

幽助

「何者だ…じゃねえん………そんな…まさか…」

妖怪

「…」

幽助

「く、蔵馬！」

そこにいたのは長く美しい銀髪、白い装束を身にまとい、氷のように冷たい眼の妖狐…蔵馬の真の姿そのものであった

妖怪

「…」

幽助

「…いや！蔵馬なワケがねえ！テメエ何者だ！？」

妖怪

「…ククッ…俺だよ。蔵馬だよ」

幽助

「嘘をつくな！蔵馬はニンゲンを喰うタイプの妖怪じゃねーハズだ」

妖怪

「ククク…今までは我慢してたんだ。しかし最近妙にハラが減ってね」

幽助

「ッ！テメエ…蔵馬をどこにやった！」

妖怪

「俺が蔵馬だつて言ってるだろ？…幽助」

幽助

「！？なんで…俺の名前を…」

妖怪

「俺が蔵馬だからだよ…なんならもつと信用させようか？俺の人間界での名は南野秀一。母とその再婚相手、その連れ子がいる。」

幽助

「…誰から聞いた」

妖怪

「…相変わらず用心深いなあ…幽助。」

こいつで信じるだろう？…そう言つて妖怪は道端の雑草を一本引き抜いた

幽助

「…まさか…そんなバカな…」

妖怪

「ククッ……」

なんと妖怪はただの雑草を鋭いナイフへと変化させた

蔵馬？

「……な？」

4 ・遭遇（後書き）

最近妙にハラが減ってね

5・蔵馬？（前書き）

やっと闘い（笑）

5・蔵馬？

いつのまにか女はいなくなっていた

幽助

「植物の…武器化…」

蔵馬？

「そう…この能力こそが俺を蔵馬と証明する最大の証」

幽助

「…本当に…蔵馬なのか…？」

蔵馬？

「最初からそう言ってるだろう…」

幽助

「……」

蔵馬？

「信じてもらえたかな？」

幽助

「…信じられねえな」

蔵馬？

「…ククッ…信じる信じないはお前の勝手だよ…今重要なのは幽助…お前が俺の邪魔をする気なのかどうかだ」

幽助

「…俺は妖怪の『食事』を否定する気なんざねえ。ただテメエが魔界に迷い込んだニンゲン以外を喰ってんのは条約違反だろ？煙鬼のオッサンのメンツは守らねえとな…」

煙鬼というのは、幽助の父…雷禅のケンカ仲間の妖怪であり『魔界統一トーナメント』の優勝者である。現在の魔界の統治者でもある

蔵馬？

「…煙鬼のメンツ？…ククツ…それだけの理由で俺の邪魔をするというのか？…くだらない…くだらなすぎる」

幽助

「……テメエみてえなカスが蔵馬をきどってるなんてヘドが出る…
つてのが一番の理由だよ！」

蔵馬？

「……それはあまり良い態度ではないな…死ぬぞ」

幽助

「テメエがな」

蔵馬？

「…よからう…もともと貴様は消すつもりだった…予定が多少早まっただけのこと」

ゴゴゴゴゴト…

妖気を解放し始める二人

シャツ！

先に動いたのは幽助

幽助

「シュッ」

幽助の鉄拳が飛ぶ

蔵馬？

「ククッ」

それを滑らかにかわす蔵馬？…

幽助

「ウラウラウラあ！」

幽助の乱打の嵐

蔵馬？

「…フッ」

踊るようなステップで全てをかわす蔵馬？

蔵馬？

「遅い」

幽助

「ッ！」

蔵馬？は一瞬にして幽助の懐に入った

蔵馬？

「ハアッ！」

…ドスッ

雑草のナイフが胸に突き刺さり、その色は紅に染まっていく…

5・蔵馬？（後書き）

先が見えません…誰か教えて！

6・敗北

胸には深くナイフがささっている

幽助

「いつ…て」

蔵馬？

「『核』を外したか」

『核』とは魔族の心臓である

幽助

「…クソ」

蔵馬？

「次で決めてやる」

蔵馬？はおもむろにえりあしに手をやった

蔵馬？

「知ってるか？綺麗な薔薇には…棘^{とげ}がある」

えりあしから取りだした薔薇に妖気を放つ

幽助

「ッ！」

未だ幽助の胸には雑草のナイフが刺さったままだ

蔵馬？

「ローズ・ウィップ！」

妖気を受けた薔薇は鉄をも引き裂く鞭へと変化した

蔵馬？

「終わりだ…風華円舞陣！！」

凄まじい風と花を舞い散らせ、薔薇の鞭は生き物のように舞う

ズガガガガッ

幽助

「ぐああああッ！」

至近距離での風華円舞陣は幽助の皮を…肉を剥ぎ取る

ギュチャアッ

ズビィッ

…ブシュッ

薔薇の棘が肉に刺さり、皮を引き裂き…血が噴き出す

幽助

「ガアアアッ！」

おびただしい量の返り血に蔵馬？の顔が紅く染まっていく

蔵馬？

「ククク…死ね死ね死ねえゝ！」

幽助の意識が消えていく…

・・・

???

「剣よ…伸びろーッ!!」

・・・?

蔵馬?

「グアアアッ! 貴様あ…よくも…」

風華円舞陣が止まった

幽助

「…くわ…ばら」

その場に崩れ落ちる幽助

蔵馬?

「貴様! 名を名乗れえ!!」

桑原

「へっ…よく聞きやがれ! 世紀の美男子・桑原和真サマたあ俺の事よ!」

蔵馬?

「…どいつもこいつも邪魔しやがって! 死ねあッ!!」

蔵馬? が桑原めがけ飛び出す

桑原

「こいやあ！ニセ蔵馬！！」

桑原と蔵馬？の攻防が始まった

ぼたん

「幽助！」

幽助

「ぼたん…」

ぼたん

「大丈夫かい？今治療するよ」

幽助

「わり…油断しちゃった…」

ぼたん

「後は桑原君に任せな…幸い桑原君の不意打ちが効いてるみたいだ…動きが鈍いよニセ蔵馬」

幽助

「…ああ、それでも桑原にや荷が重い相手だ…」

ぼたん

「そうだね…アンタを回復したらさっさと逃げるよ？」

ぼたんは全霊力を込めて治療を始めた

6・敗北（後書き）

幽助は弱くない。

相手のスピードが速いだけです。

決して幽助は弱くない（笑）

7・反撃

実際ぼたんの治療は優れていた。しかし、それ以上に幽助の回復速度は異常だった。

幽助

「サンキュ。ぼたん」

ぼたん

「まったく…アンタはバケモンかい」

フフ…と微笑むぼたん

幽助

「それでも一応魔族だからな」

ニツ…と笑いかえす幽助

ズギヤツ

桑原

「ぐあっち」

桑原が吹っ飛ばされてくる

幽助

「桑原！」

ぼたん

「桑原君！」

桑原

「よ…よお浦飯。もうお目覚めか？」

幽助

「ああ、ごくろーだったな。バトンタッチだ桑原」

ぼたん

「ちよ、ちよつと幽助！？逃げるんじゃ…」

幽助

「うるせーな。俺には『にげる』なんてコマンドはねーんだよ」

桑原

「ちよつと待て。アイツは俺の獲物だぞ浦飯」

幽助

「そーか桑原クン代わってくれるのかー」

桑原

「ヒトの話を聞ゲヒヤッ！！」

幽助のアップアが桑原に炸裂。桑原が宙に舞う

ぼたん

「災難だねえ」

グシヤッ

桑原が地に落ちる

蔵馬？

「…もういいか？」

幽助

「ああ。待たせたな…第2ラウンドだ」

蔵馬？

「今度こそ殺してやるよ…」

幽助

「次は油断しねえ。オメーも本気でこねーと…」

蔵馬？

「本気でいかないと…なんだ？」

幽助

「瞬殺しちまうぜ」

プチッ

蔵馬？

「上等だコラ！全力で潰してやるよ！」

幽助

「へっ…蔵馬のフリは辞めたのか？しゃべり方が素になってるぜ」

蔵馬？

「黙れえ！もはや蔵馬などおでもいいわッ！」

先程とはうって代わり、幽助は冷静さを取り戻していた

幽助

「きやがれ」

蔵馬？

「死いねええッ！！」

蔵馬？が超高速で襲いかかる

幽助

「確かにオメーのスピードはたいしたもんだ…でもなあ！」

幽助の右手に力が集まる

蔵馬？

「シャアッ！」

…ビュアッ

幽助は蔵馬？のスピードを見切り、その拳をかわした

蔵馬？

「…な…」

ガシッ

幽助の左手が蔵馬？の首をつかむ

幽助

「くらいやがれ！」

蔵馬？

「…ああああああッ！」

首を抑えられているため身動きが出来ない

幽助

「ッ霊・丸！！」

ズゴゴゴッ…ボォン！！

蔵馬？

「ぎいやあああああッ！！！」

特大霊丸により蔵馬？の身体が弾け飛ぶ

蔵馬？

「…な…ぜ…、俺のスピードを…見切れる…」

アタマだけの蔵馬？が悔しそうにつぶやく

幽助

「へっ！俺の仲間にやテメエの１００倍は速えヤツがいるぜ」

7・反撃（後書き）

だんだん長くなっていくー（＾|＾；）
ね？幽助は強い？（笑）

8・真相

幽助

「…で？オメー本当は誰なんだ？」

偽蔵馬

「…蔵馬」

ゴン

偽蔵馬

「あがッ！」

幽助達はアタマだけの偽蔵馬に尋問を行っていた

幽助

「さつさと白状すりゃあ逃がしてやる」

偽蔵馬

「……わかった…俺の名前は翔王^{しょうおう}。自慢のスピードでちょっとは名の通った妖怪だ」

幽助

「しょうのう？知らねえな。その妖怪がなんで蔵馬のカッコしてんだ？」

翔王

「…頼まれたんだよ」

幽助

「頼まれただ？誰に？」

翔王

「……」

ゴン

翔王

「おぶあ！」

幽助

「早くお言い」

翔王

「あんたロクな死にかたしねえよ。…魔界では見たことのねえ妖怪だった…なんて言ったか…一本ウンチ…みたいな名前だったな」

ゴン

翔王

「ぎゃば！」

幽助

「マジメに答えろ」

翔王

「嘘じゃねーよ！クソみたいな名前だったんだって！」

ぼたん

「そんな汚い名前の妖怪いたかねえ…」

幽助

「…うーむ」

桑原

「…戸愚呂じゃねえのか？」

桑原がいつの間にか復活して言った

翔王

「そおだ！トグロ！戸愚呂っていうちっちえー妖怪だった！なんでも蔵馬って妖狐に恨みがあるとかで…」

幽助

「戸愚呂兄か…」

桑原

「確か戸愚呂兄は蔵馬にやられて入魔洞窟で永久束縛だろ？」

ぼたん

「誰かが戸愚呂を解放したのかもしれないね…」

翔王

「おい」

幽助

「なんだ」

翔王

「もお行っているのか？」

ぼたん

「ちよいとお待ちよ。アンタはどやって蔵馬の体と能力を手に入れたんだい？」

翔王

「見たことの無い妖怪に蔵馬の姿と能力を貰った。戸愚呂の復讐に協力しているようだったな……」

桑原

「結局戸愚呂はなにがしたいんだ？」

翔王

「蔵馬の姿をした妖怪が無差別に人間を襲えば、本物の蔵馬は霊界のブラックリストに載り、家族とも一緒に暮らせなくなるだろう？」

幽助

「やる事が汚ねえな」

桑原

「確かに戸愚呂の力じゃ蔵馬にや傷ひとつ付けねえもんな」

ぼたん

「確実な手だね」

幽助

「それで本物の蔵馬はどこにやったんだ？」

翔王

「それは魔界の……」

ボンッ

瞬間。翔王が弾け飛んだ

幽助

「!？」

桑原

「…スゲー妖気だ」

ぼたん

「あそこ！」

ぼたんが指差す方向には長身の男が立っていた…。

8・真相（後書き）

やっと人間界編（？）も佳境…飛影が出てこない（笑）

9・魔界へ

コツ…コツ…

スラリとした長身の男がゆっくりと歩いてくる。全身黒づくめでマントをはおっている

幽助

「誰だテメエ」

…コツ

男が幽助達の前に立ち止まる

ぼたん

「幽助…気をつけるんだよ？ なんだか異様な雰囲気を感じるよ」

幽助

「…ああ、わかってる」

桑原

「妙な妖気だ」

構える幽助と桑原

男

「…浦飯幽助と桑原和真だな…」

男は低い声でつぶやく

幽助

「だつたら？」

桑原

「やんのかコラ」

ぼたん

「アンタ何者だい？」

男

「…穿うがち」

ぼたん

「穿…どこかで聞いたような…」

幽助

「テメエ戸愚呂の仲間か？」

穿

「…正確には仲間ではない。我らは互いに利用しあっているだけだ」

桑原

「手を組んでるって事か」

穿

「ああ」

ぼたん

「戸愚呂のくだらない復讐に手を貸してアンタに何の得があるのさ」

穿

「私は戸愚呂の復讐になど全く興味はない。私の目的は浦飯幽助・桑原和真・蔵馬・飛影の戦闘データの採取」

幽助

「俺達の…データ…」

穿

「左様。すでに魔界の有力妖怪のデータは数百年かけて収集済みだ」

ぼたん

「データを集めてどうする気だい？」

穿

「データを元に強化サンプルを精製…改良し最強の人工妖怪軍隊を造り上げ、私が魔界を…霊界を人間界を統一するのだよ…」

桑原

「ちきしょう…またコレ系かよ…」

幽助

「左京並のクレイジー野郎だな」

穿

「ククク…なんとも言うが良い」

幽助

「コイツをココでやつちまえば全部解決すんじゃないかねえか？」

穿

「フハハ…やれるものならやってみたまえ…ただし、蔵馬君を永久

に失う事になるがな」

幽助

「んだと？」

桑原

「蔵馬はどこだ!？」

穿

「それを教えたらつまらないだろう?…魔界へきたまえ…」処刑人の洞窟』で待っているよ…」

ボンッ

穿の煙幕があたりを満たす

ぼたん

「ゲホ…ゲホッ」

幽助

「ちきしょう!逃がすか…ゲホッ」

桑原

「見えねえ!」

煙が晴れていく…

ぼたん

「…逃げられたね」

桑原

「どうすんだ？浦飯」

幽助

「決まってんだろ。行くぜ…魔界に」

9・魔界へ（後書き）

新しいキャラ出しちゃったよ！めんどくさいことになってきた〜
笑）

10・コエンマと隊長

穿^{うがち}に逃げられた翌日。幽助、桑原、ぼたんはコエンマへの報告を済ませ、境界トンネルを開いていた。
特防隊隊長

「間もなくトンネルが開きます」

ぼたん

「わざわざすまないね」

コエンマにより境界トンネルの結界が取り払われたとはいえ、境界トンネルを開くには専門の技術が必要であつた

隊長

「いえ…コエンマ様の命令ですので」

桑原

「戸愚呂のヤロー、今度こそトドメさしてやんぜ!」

幽助

「穿つてヤローもオシオキが必要だべ」

やや興奮気味の2人がトンネル開通を心待ちにしている

ぼたん

「あら…やる気マンマンだね」

隊長

「…開きますよ」

幽助・桑原

「！」

空間に亀裂が入り、徐々に開いていき、丸いトンネルが完成していき……

幽助

「うっし。行くぜ」

桑原

「おう！」

コエンマ

「うむ！」

……

幽助

「オメエも行くのかよ！？」

コエンマ

「うむ！」

桑原

「うむ！じゃねえよ！」

隊長

「コエンマ様！」

コエンマ

「ワシだって蔵馬を案じておるのだ…邪魔はせぬ。」

皆

「いや邪魔」

コエンマ

「がーん」

・・・

ぼたん

「氣をとりなおして…行くかい」

桑原

「ああ」

幽助

「首洗って待つてろよ…戸愚呂…」

3人は界境トンネルへ侵入していった…

コエンマ

「…」

隊長

「良かったのですか？今ならまだ追いつけますが…」

コエンマ

「イヤ…いいのだ。実際ワシは役にたたん。魔封環なき今…ワシは

足手まとい以外の何者でもないしな」

隊長

「…あなたは霊界、人間界、魔界すべてを幸せにしようと日々チカラを使っておられるでしょう」

コエンマ

「その程度の事…アイツらの危険に比べれば屁でもないわ」

隊長

「ふ…やはりアナタは素晴らしい指導者ですよ…」

境界トンネルが閉じられた…

10・コエシマと隊長（後書き）

ちよつとつまない話でした（笑）

11・魔界

魔界

幽助が偽蔵馬（翔王）と闘っている頃…飛影は魔界に到着していた。

飛影

「…」

????

「おお！飛影！久しいのう！」

現魔界統一者・煙鬼である。飛影はまず煙鬼を訪ねていたのだ。

飛影

「霊界・人間界での『食事』事件について何か知ってるか？」

煙鬼

「なんじゃずいぶんいきなりじゃのー」

ガハハ…と煙鬼

飛影

「緊急事態なんだ」

煙鬼

「まあそう急くな。これはあくまで噂だがな…どうやら『トグロ』という妖怪が絡んでいるらしい…」

飛影

「…戸愚呂だと？」

煙鬼

「なんじゃ…知り合いか？」

飛影

「…いや」

煙鬼

「変なヤツじゃのー！ガハハ！」

飛影

「…それで？その戸愚呂の居場所は？」

煙鬼

「ハッキリした事はわからんが…どうやら処刑人の洞窟…断首台の丘付近を根城にしておるようだのう」

飛影

「そうか…」

くるりと煙鬼に背を向け、邪魔したな…と言い去る飛影

煙鬼

「…変わった男じゃ」

魔界・断首台の丘

飛影

「全く妖気を感じん…チツ！ハズレか…」

????

「そうでもないみたいよん」

飛影

「！」

いつの間にか飛影の背には女が立っていた

飛影

「貴様…いつのまに…」

女

「あら 気付かなかった？」

飛影

「…俺になにか用か？」

女

「冷たいわね… 噂どおりのクールガイね」

飛影

「用がないなら俺は行くぞ」

女

「ふふ」

瞬間、女は飛影に襲いかかってきた

飛影

「ッ！！」

飛影は超速で回避。しかし女は空中でもうワンステップ踏み、飛影めがけて突進してきた

女

「逃がさないわよん」

女の拳が飛影の腹にめり込み…メキメキと音を立てる

飛影

「…ぐ…」

スパアッ！

飛影はすかさず刀を抜くが女はすでに飛影の間合いの外へ逃げている

飛影

「チッ…逃げ足だけは立派だな」

女

「あら 誉め言葉？そう…アタシのこの脚はアナタ以上のスピードを生むわ」

タンタンと足踏みをしながら自分の脚を自慢している

飛影

「…俺以上だと？ククク…のぼせあがるなよ」

女

「あら…じゃあ試してみる?」

飛影

「…上等だ」

ヒパッ!

風を切る音と共に両者の姿が消える。時折あちろちろでチカチカと火花が散っているが、2人の姿は見えない

バチッ

ガギッ

ギインッ

女

「シャア」

飛影

「…ぐあ!」

再び両者の姿が見えた時、飛影は地面に膝をついていた

11・魔界（後書き）

やつと飛影（笑）

12・速度の勝者

女

「がっかりだわ　その程度だったなんて」

飛影

「…あまり俺をなめるなよ？」

ピッ

女

「！…へえ…」

女の頬に血が滲む

飛影

「貴様の脚はなんだ？血の流れを感じん」

女

「あら　わかる？この脚はアタシのお気に入りのハカセに貰った義足よん」

飛影

「…フン」

つまらなそうに鼻をならす飛影

女

「そおだ　自己紹介がまだだったわね　アタシは跳ちゅう　よろしくね

ん
」

飛影

「貴様の名などどーでもいい」

跳

「冷たいわねん」

飛影

「…戸愚呂を知っているな」

跳

「…フフ さて…どうかしらん？」

飛影

「…白状しないと斬るぞ」

跳

「どおぞお好きなように…できるものなら」

飛影

「フッ」

タンッ

飛影が身軽なステップで跳に近づく

跳

「」

瞬間、飛影が斬りかかる

ブオッ

しかし刀は空を斬る

跳

「遅いわねん」

飛影の背後に回った跳の拳が放たれる

シャッ

跳の拳は飛影の残像を捕えた

飛影

「貴様がな」

跳

「!？」

飛影

「邪王炎殺剣！」

紅蓮の剣が跳の背中を引き裂く

ズシャッ

跳

「…ッ!!やるわねん」

かろうじて致命傷を避け、すかさず間合いをとる跳

飛影

「戸愚呂はどこだ？言わんと消すぞ」

跳

「…ふふ」

ゴオッ

その時、跳の周囲に妖気の風が巻きおこった

跳

「そろそろ本気でいってもいいかしら？」

飛影

「なに？」

ヒイン

飛影が風を切る音を認識した瞬間…

…ゴプッ

飛影

「…」

口いっぱい鉄の味がひろがる

跳

「Bye - Bye」

跳の腕は飛影の体を貫いていた

飛影

「……クソ」

飛影の意識が遠のく…

ドサッ

12・速度の勝者（後書き）

なんか変な感じになってきたー（- - ;）

13・紅蓮の貴公子

…深い闇の中…

飛影は歩いている

先には光

後ろには温もり

飛影の周りだけが漆黒に包まれている

跳

「弱いオトコねん」

…黙れ

蔵馬

「だから誰も助けることができない」

…違う

…俺は…お前を助けようとした…

雪菜

「弱いから…自分が兄だと言えないのですね」

…雪菜…

蔵馬

「弱いから」

跳

「弱いから」

雪菜

「弱いから」

…やめてくれ！…俺は強くなった…心も…体も…昔より遥かに…

…強く…なつたはずだ…

雪菜

「強く？強さとはなに？」

…何？

雪菜

「強靱な肉体？豊富な戦闘経験？産まれついでのパトルセンス？」

跳

「アナタはアタシに負けたじゃない」

蔵馬

「このまま無様に死んでゆくのだろうか？」

…違う！昔の俺ならば迷わず戦闘の強さと答えた…蔵馬も見捨ていた…

だが俺は知つたんだ！アイツに出会い…俺は変わった…真の強さを知つた！

雪菜

「真の強さ？」

…信じる心

アイツが…幽助が教えてくれた…自分の信じたもの…友人、家族、愛する人…そのためなら、俺たちはどこまでも強くなれる！

信じているから

守りたいから

大切だから…

それが俺の…『つよさ』だ！！

蔵馬

「…それでいい。お前の闇は『迷い』。先の光は『信じる心』。後の温もりは…『愛』」

…蔵馬…

飛影の周りから闇 迷い が晴れていく…

…ああ。俺が信じるは『仲間』そして『俺自身』！必ず戸愚呂のクビを取ってやるぜ！

フフ…蔵馬は笑いながら消えていった

現実世界

飛影

「…おい」

跳

「…！」

去ろうとする跳を呼び止める

跳

「なかなかしぶといわねん　でも辞めといた方がいいわ…アナタ、もう虫の息でしょう」

飛影

「……クク…言っただろう。俺を…なめるなあ…！」

ドンッ

飛影の妖気が邪炎へと変化し、うねりを上げて燃え上がる

跳

「む…胸を貫かれたのよ？致命傷でしょう…あの出血で…どうしてこんな炎を出せるのよ！？」

飛影

「俺の信じるもののため…俺自身のために！貴様には消えてもらっ」

飛影の邪眼が妖しく光る

跳

「…こ…こないで…」

飛影の炎は巨大な津波の如く火力を増していく

跳

「ば、バケモノ！」

明らかに計算外という顔の跳

飛影

「おおおおッ…！」

シャッ

飛影は黒龍を自らの体へ取り込む。すると飛影の妖気が何倍にも膨れ上がった

跳

「ああああ…た、助けて…と、戸愚呂の事を教えるわッ！だから…」

飛影

「…邪王炎殺…」

大気が震え、熱風が巻き起こる

跳

「戸愚呂は処刑人の洞窟にいるわ！だから助けて…！」
必死に命ごいをする跳

飛影

「…黒・龍・波あ！」

飛影の右手より暗黒の火炎龍が飛び出し、雄叫びを上げながら跳め
かけ襲いかかる

跳

「ああああああああああああああッ!」

!!!!!!!!!!

跳

「ッ!」

黒龍は跳の真横を通り過ぎていった

飛影

「…処刑人の洞窟だな」

跳

「…わざと…外した…?」

飛影

「…」

飛影が去ろうとすると

跳

「待って!」

飛影

「…なんだ」

跳

「処刑人の洞窟には戸愚呂の他にも妖怪が待ってるわ……」

飛影

「……」

跳

「最も気をつけるべきはアタシに義足を付けた裏魔界医『穿^{うがち}……ヤツの『メス』には気をつけなさい。一度でも切られたら終わりの思いなさいクール・ガイ」

飛影

「……フ」

飛影は処刑人の洞窟へと向かった

13・紅蓮の貴公子（後書き）

黒龍波とかめはめ波撃ちてー！

14・新たな妖怪

跳

「アタシもヤキがまわったものねん」

飛影が去り、一人残された跳

跳

「あーあ、勝ったと思ったのにな…あんないい顔で立ち上がるんだもの」

フフ…と跳

????

「まったく…テメーにやガツカリだ」

跳

「…蛮鬼ばんき!？」

蛮鬼

「あんなヒヨロイ野郎に負けたあな…」

跳

「うるさいわねん…からかいに来たの？」

蛮鬼

「あ？俺様がんな事でわざわざ来るわきゃねーだろ」

跳

「…じゃあ何の用よ？」

蛮鬼

「決まってるだろ…裏切り者には死を！世の中の鉄則よ」

跳

「…そう。いいわん 相手になってあげる」

フラっ…と跳が立ち上がる

蛮鬼

「飛翔舞姫・跳！穿の命により死んでもらおう！..」

跳

「…なるほどねん アタシは飛影のデータを得るための捨て駒ってワケ？」

蛮鬼

「ああ。テメーも余計な情報を飛影に与えなけりや死なずにすむのになあ」

跳

「そうね…ふふ」

蛮鬼

「ここで消しとかねえと飛影の味方になりかねん。弱っているうちに絶つ！」

跳

「…そうかも…ね」

蛮鬼

「死ねあ！」

蛮鬼が大きくふりかぶる

ブオン

空を切る拳

跳

「アナタのスピードじゃアタシは捉えれないわん」

蛮鬼の背後からつぶやく

蛮鬼

「グフフ…これならどうか…？」

蛮鬼が印を結ぶ

バツバツバツ

跳

「ッ！チィッ！」

何が起こるかを悟った跳が拳を繰り出す

ガシィッ

跳

「ッ」

蛮鬼は片手で印を結びつつ跳の拳をつかむ

跳

「…しまったッ！」

蛮鬼

「鬼道…」

蛮鬼の腕が巨大化する

メキヤッ

あまりの握力に跳の拳がイビツな音を立て潰れる

跳

「ッぎやああああッ！！！」

蛮鬼

「…金剛拳ん！！！」

跳

「！！！」

ボギヤッ

跳の頭が肉片となる

蛮鬼

「任務完了！…グフ…。飛影の戦闘データも手にはいった…これで穿に新たな能力を貰うか」

幽助が穿に逃げられた直後の事であった。

14・新たな妖怪（後書き）

野蛮な鬼と書いて蛮鬼！（笑）

15・飛影拉致

飛影

「…っ！こんな時に…『冬眠』か！」

邪王炎殺拳最強奥技・炎殺黒龍波にはたったひとつ弱点がある。それは黒龍波使用後、使用者もろとも数時間『冬眠』してしまう事である

飛影

「く…そ…」

その場に倒れこみ、『冬眠』に入る飛影

1時間後

蛮鬼

「なんだあ？こんなトコで寝やがって。ヤル気あんのかコラ」

跳を抹殺し、洞窟へ帰る途中の蛮鬼に発見された

蛮鬼

「…丁度いい。コイツもここで消しとくか」

蛮鬼が印を結び始める

「???」

「お待ちなさい」

蛮鬼

「あん?...おお、穿！帰ったのか」

穿

「はい。たった今。それより飛影を洞窟までかつぎなさい」

蛮鬼

「お、おう」

穿

「ククク...」

蛮鬼は飛影をヒョイとかつぎ、穿と共に処刑人の洞窟へと帰っていった...

時間は次の日に移る

煙鬼

「飛影なら昨日来たぞい」

幽助

「ホントか！？オッサン！」

煙鬼

「ああ。トグロの情報を教えてやったわい」

桑原

「それで！？飛影のヤローはどこ行ったんだよ？」

煙鬼

「おそらくは断首台の丘か処刑人の洞窟だろうな」

幽助

「んなコト言われてもどこだかわかんねーよ」

ぼたん

「どっちの方向だい？」

煙鬼

「ここからまーっすぐ北じゃ。そこにどでかい岩柱があるので。それが断首台の丘だ」

ぼたん

「北へまっすぐだね」

幽助

「うっし！急ごうぜ」

桑原

「飛影のヤローにいいとこ持ってかれんのはシャクだしな」

煙鬼

「がはは！頑張れ若僧共」

幽助一行は魔界に到着後、まずは魔界で調査している（ハズ）の飛

影と合流しようと、煙鬼を訪れていた

桑原

「しかし飛影がマジメに調査してたなんてスッゲー意外だな」

幽助

「アイツはああ見えて根は仲間思いのいいヤツなんだよ」

走りながら幽助は微笑む

桑原

「仲間思いだ？あの冷徹逆毛チビが？」

ぼたん

「桑原君…飛影がないのをいーコトに」

桑原

「鬼の居ぬ間に…てヤツよ」

ケラケラと笑う桑原

ぼたん

「…まあ本人の前で言ったら丸コゲだもんね」

幽助

「…お。アレじゃねえか？」

幽助たちの前方に崩壊した岩柱が姿を現わした

桑原

「…浦飯。ココって…」

幽助

「…俺達が仙水と闘った場所だな」

桑原

「…なつかしーな」

ぼたん

「なつかしんでる場合じゃないよ！さっさと戸愚呂のアジトを探すよ」

幽助

「アイアイサー」

桑原

「…！？」

その時、桑原がナニかを発見した

桑原

「浦飯！」

辺りは血の海だった…

16・追跡・復讐

幽助

「…ひでえな」

辺りには大量の血と肉が飛び散っている

桑原

「飛影の仕業か？」

幽助

「飛影でもここまで粉ごなにやできねえよ。それに『斬った』…っというより『潰した』って感じた」

ぼたん

「これ以上ここにいっても無意味だね。処刑人の洞窟つてのを探すよ」

幽助

「…ああ」

幽助たちはかつて跳だったモノをあとにした

それから1時間もたった時

ぼたん

「…おや？」

幽助

「どうした？ぼたん」

ぼたん

「ちよいと幽助。これ見てみなよ」

断首台の丘からやや離れた場所に、それは落ちていた

幽助

「！…これは」

桑原

「飛影の氷涙石！」

氷涙石とは、氷女という妖怪の涙から出来る宝石であり、飛影と雪菜の母の形見でもあった。

ぼたん

「…これはマズイ方向に向かつてるかもしれないね…」

幽助

「…飛影！」

氷涙石を握りしめる幽助

桑原

「…なあ。これ足跡じゃねえか？」

ぼたん

「え？」

どれどれ…ぼたんは桑原の指差す所を見る。それは確かに足跡のよ

うに見える

ぼたん

「飛影のではないようだね…」

幽助

「煙鬼のオッサン並にデケエヤツじゃねーとこなくなっつきり足跡は残んねーだろ」

桑原

「行ってみようぜ」

ぼたん

「…そうだね。他に手掛りがあるわけでもないし…」

幽助

「ああ」

幽助たちが蛮鬼の足跡を追いはじめた頃…

処刑人の洞窟

???

「ヒヤハハ！まったく、笑いが止まらねえなあ！」

背の低い妖怪が高笑いしている

穿

「おや？貴方の計画は失敗したのではなかったのですか？」

蛮鬼

「ああ。わざわざ蔵馬の姿と能力を与えてやったのに翔王のカスがドジリやがったお陰でな」

????

「もはや計画なんかどうでもいいんだよ！より蔵馬を苦しめる方法を思いついたんでなあ！」

穿

「…ほう。して、その方法とは？」

????

「蔵馬にとって最も大切なのはなんだ？母親だ！だが母親はすでに霊界によって守られてやがる…」

穿

「そうですね」

????

「蔵馬にとって母親と同じ位大切なのが『仲間』だ！俺にとってはムシズの走る言葉がなあ！」

蛮鬼

「ナカマ…グハハ」

????

「ヤツの目の前で命よりも大事な『仲間』を一匹ずつぶつ殺してい

くのよお！ひひひ…仲間を殺された絶望のなかでヤツは死んでく
よ！」

穿

「…ではとりあえず浦飯幽助、桑原和真を捕えればよいのですね？
戸愚呂」

戸愚呂

「ああ、頼むぜ？裏魔界医サンよ」

穿

「…楽しみですねえ」

16・追跡・復讐（後書き）

ウンコマンがやっと登場！

17・再会

…ひどく蒸し暑い

…それにこのニオイ

…まるで密林にいるようなニオイと湿度

飛影

「…う…」

蔵馬

「お目覚めかい？」

『冬眠』から覚醒した飛影の耳に、心地のよい声が聞こえる

飛影

「蔵馬！？…ッ！！」

そこには探し求めていた妖狐・蔵馬がいた

蔵馬

「…すまない飛影、巻き込んでしまつて…」

飛影、蔵馬は巨大な植物に体の半分を埋め込まれ、身動きがとれなくなっていた

飛影

「…ちつ。なんだこの植物は…」

蔵馬

「捕縛樹の改良種のような。触るだけで妖気を吸いとられるみたいだな…」

飛影

「どつりでうまく炎が出せないワケだぜ」

チツ…不機嫌に舌打ちをする飛影

蔵馬

「どうにかして脱出しなければ…幽助たちが危険だ」

飛影

「…幽助が魔界にきているのか？」

穿

「ええ」

飛影

「!？」

2人が捕えられている部屋の隅には、いつの間にか穿が居た

飛影

「…貴様…何者だ…」

穿

「はじめまして飛影くん…私は穿。以後お見知り置きを…」

飛影

「…穿だと？」

跳が忠告していた裏魔界医・穿がそこにいた

穿

「ククク…蔵馬くん。どうやらまたお仲間がここに向かっていているようですねえ」

蔵馬

「…くッ」

穿

「…ククク。ワクワクしますねえ…もうすぐ私の夢が現実となるのですから…」

飛影

「マッド・ドクターめ」

穿

「なんとも言いなさい。さて…私は浦飯幽助、桑原和真を捕えて来ましようか」

蔵馬

「貴様あ！」

必死にもがくが捕縛樹からは抜け出せない

穿

「貴方には戸愚呂からプレゼントがあるようですよ？」

蔵馬

「何？」

穿

「ククク…楽しみに待っていて下さいよ」
不適に微笑み、穿は部屋を去る

蔵馬

「…くそ。戸愚呂…」

飛影

「…ふん。ヤツの考える事などがしれてる。そんなことよりも
お前は脱出方法を考えろ」

飛影はまだ炎を出そうときばっている

蔵馬

「…ああ。そうだな」

蔵馬は瞳を閉じ、思案を始めた…

17・再会（後書き）

うひゃー

18・愛のチカラ

桑原

「しかし長えな」

ぼたん

「ほんとどこまで続くのかねえ」

断首台の丘から蛮鬼の足跡を追って数時間。さすがに疲労の色がでてきた

幽助

「大丈夫か？ぼたん」

ぼたん

「ん。平気」

とVサイン

桑原

「ところで浦飯」

幽助

「どーした？クソならあっちの岩陰で…」

桑原

「アホか！…この足跡が戸愚呂のアジトに続いてたとしてよ…どうやって蔵馬と飛影を助けたすつもりだよ」

幽助

「ああ？戸愚呂のヤローをぶっ飛ばせば万事解決だろーが」

桑原

「……」

ぼたん

「呆れたアホだねえ」

やれやれ…と呆れ顔の2人

幽助

「なんでだよ」

桑原

「相手はあの戸愚呂兄だぞ？」

ぼたん

「あいつが蔵馬と飛影を人質にしてるんだよ？戸愚呂が人質を利用せず素直にやられるヤツかい？」

幽助

「けけけ…安心なさい！そこら辺の対策は考えてるぜ」

桑原

「なんだよ」

幽助

「ふっふっふ…」

ぼたん

「？」

幽助

「次元刀だよ」

桑原

「無理」

ぼたん

「早！」

沈黙…

幽助

「いいか桑原くん。今回のミッションは全て君の腕にかかっているのだよ」

ぼん、と肩に手をのせ桑原をさとす

桑原

「なかなか思い通りにや出ねえんだよ」

幽助

「便秘の主婦じゃあるめえし…やる気でカバーだよ桑原くん！」

桑原

「無理だっって言うてんだろコラ」

ぼたん

「ここで飛影と蔵馬が死んだら…雪菜ちゃんは哀しむだろうねえ…」

ぼたんがボソツと呟く

ピクッ

ぼたん

「せっつかく桑原君の活躍を雪菜ちゃんに話せると思っただのにねえ」

ぼたんナイス！幽助は心底ぼたんに感謝した

桑原

「ふ…フハハハ！この桑原サマに任せなさい！見ていて下さい雪菜さん！この俺の雄志を！」

幽助

「…」

ぼたん

「単純だねえ」

桑原

「うらあ！」

瞬間、桑原の手に次元刀が現れた

桑原

「この足跡に残った妖気めざして次元を斬る！行くぜヤローどもお！」

桑原が次元刀を振ると、目の前の空間が裂け、次元の穴が姿をあらわした

幽助

「首洗ってまってやがれ！戸愚呂」

ぼたん

「まったく…桑原君は扱いやすいねえ」

3人が入ると、次元の穴は静かに閉じていった…

18・愛のチカラ（後書き）

疲れたー

19・救援

処刑人の洞窟

蔵馬は考えていた

妖気を吸われ、身動きひとつ取れないこの状況を、どう打開するか…

飛影

「どうやら客のようだ」

飛影は部屋の外にかすかな気配を感じとっていた

そのとき、部屋のトビラが静かに開いた…

戸愚呂

「気分はどうだい？蔵馬あ」

そこには諸悪の根源、戸愚呂がいた

隣に蛮鬼を引き連れて

蔵馬はただ目を閉じている

戸愚呂

「ククク…つれないなあ。楽しく話そうぜ」

蔵馬の目が開いていく

蔵馬

「…穿が言っていたお前のプレゼントとはなんだ」

冷めた眼で戸愚呂を見下ろし、問う

戸愚呂

「ひひ…怖え怖え…。なんだ、知っていたのか。蔵馬あ…テメエにやあ『仲間の死』という最高のプレゼントを用意してやるぜ」

蛮鬼

「…ぐふふ」

飛影

「ふん。考えが単純だ」

蔵馬

「俺を今のうちに殺せよ戸愚呂。そうしないと…俺は必ず貴様を殺すぜ？」

身動きができず、妖気も吸われているにもかかわらず。蔵馬の空気は異常であつた

戸愚呂

「…へ…そんな格好でなにができるんだよ」

その氷のような冷たい眼差しは、戸愚呂に『恐怖』を与えるには十分であつた

蛮鬼

「ぐはは。強がつてやがる」

鈍感なのか、蛮鬼は蔵馬の雰囲気気付いていない様子で笑っている

飛影

「…クク」

蛮鬼に続き、飛影も笑いだす

戸愚呂

「なんだテメエら…身動きもとれねえ！妖気もすっからかんのクセに…」

蔵馬と飛影は戸愚呂の後方にある気配を感じていた

蔵馬

「お前の負けだ。戸愚呂」

戸愚呂

「なに言って…」

そのとき、戸愚呂の後の空間が裂けた

蛮鬼

「！」

戸愚呂

「……な…」

戸愚呂と蛮鬼は状況を飲み込めてない

幽助

「ウルァ！」

次元刀により蛮鬼の妖気を追ってきた幽助たちが、目の前の戸愚呂めがけ飛び出す

戸愚呂

「ぐゲッ！」

幽助の鉄拳が振り向き様の戸愚呂を吹き飛ばす

蛮鬼

「なんだデメエら！」

状況を飲み込んだ蛮鬼が叫ぶ

桑原

「愛の戦士！桑原和真様とその一行よ！！」

桑原が次元刀を振りかざし、その切っ先を蛮鬼に向ける

19・救援（後書き）

話進んできたー（・o・）ノ

20・逃走

蔵馬の足下には戸愚呂が伸びている

蛮鬼

「愛の戦士だ？ふざけやがって」

ぼたん

「桑原君は大マジなんだけどね」

そそくさと柱の陰に避難したぼたんが呟く

幽助

「仲間を返してもらっぜ！」

蛮鬼

「ぐふふ…そうか、テメエら蔵馬の仲間か」

桑原

「そーゆーこった」

蛮鬼

「俺サマは蔵馬をどうしようと思ひはねえ」

幽助

「あ？」

蛮鬼

「いいぜ？連れてっても。蔵馬と飛影のデータは取り終わったから

な」

桑原

「…なんか拍子抜けだなオイ」

幽助たちはテキパキと2人を解放した

蔵馬

「…く。すまない皆…」

ぼたん

「なーに言ってるんだい。アンタはなににも悪くないだろう？」

幽助

「ああ、全部戸愚呂の仕業だしな」

蔵馬

「…すまない」

飛影

「フン。だいたいあの時、入魔洞窟で戸愚呂を殺しておけばこんな事にはならなかったんだ」

桑原

「捕まったくせに」

飛影

「……」

ぼたん

「とにかく！さっさと逃げるよ。2人を休ませなきゃ」

蔵馬も飛影も、見た目よりだいぶ疲弊していた

桑原

「ああ、…次元刀！」

次元を裂く桑原

蛮鬼

「ちょっと待て」

今まで黙って見ていた蛮鬼が口を開く

蛮鬼

「俺は蔵馬と飛影は返してもいいって言ったんだぜ？」

つまり…

幽助

「俺たちは残れって事か…」

蛮鬼

「ご名答」

桑原

「テメエの言う事なんざ聞いてられっか！」

蔵馬と飛影、ぼたんを次元の裂目に放りこみ、自分も穴に入ろうと

する桑原

桑原

「行くぞ浦飯！」
そのとき

蛮鬼

「させるかあ！」

蛮鬼が飛び出す

幽助

「ちっ！先に行け桑原あ！！！」

蛮鬼の突進を体で受け止め、幽助が叫ぶ

桑原

「絶対に戻ってこいよ……浦飯……」

蔵馬

「……幽助……」

次元の裂目が閉じていく……

ぼたん

「幽助えーーーーっ！！！」

飛影

「……」

次元の裂目が消滅した

蛮鬼

「ちいっ！…まあいい。浦飯幽助、テメエが残ってくれたからなあ」

幽助

「サービスすんぜ？」

蛮鬼

「ぐふふ…そいつぁ楽しみだ」

間合いをとり、妖気を解放しはじめる2人…

空気が…震える

20・逃走（後書き）

次は幽助VS蛮鬼だー！

21・幽助VS蛮鬼？

蛮鬼

「ぐふふ…浦飯幽助。テメエの戦闘データ、きっちり取らせて貰うぜ」

そういうと、蛮鬼は小型の機械を取りだし、上方へ放り投げる

幽助

「…？」

すると、放り投げられた機械はみるみるうちに君の悪い羽蟲へ変貌していく

幽助

「…なんだありや、気持ちわりいな」

蛮鬼

「データ採取機蟲『あつん亞雲』。テメエのデータをとってくれる記録役だ」

幽助

「なるほど」

蛮鬼

「…そんじゃまあ…行くぜ！」

蛮鬼が飛び出し、剛腕を振りかざす

幽助

「遅え！」

ボツ

蛮鬼の拳は風を殴る

すぐさま蛮鬼の懐に入る幽助

幽助

「うルア！」

幽助の鉄拳×5が蛮鬼のボディに突き刺さる

蛮鬼

「……がッ……！」

戸愚呂のように吹き飛びこそしないが、予想外の攻撃力に思わずよろめく蛮鬼

幽助

「オラオラオラア」

さらに幽助の拳が飛ぶ

蛮鬼

「ガハッ……ッ！」

モロに顔面に喰らう蛮鬼

幽助

「くらいやがれ！」

幽助の右手に凄まじい勢いで力が集まってい

幽助

「ッ霊丸！」

轟音とともに霊丸が蛮鬼の体をつつんでいく

蛮鬼

「…お…おおおおあー！」

瞬間

霊丸は弾け飛んだ

幽助

「…な…」

幽助渾身の霊丸は、蛮鬼の妖力の前に敗れさった

蛮鬼

「ハア…ハア！正直驚いたぜ…まさかここまでのパワーがあるとはな…」

幽助

「ケッ…霊丸を弾き飛ばしといてよく言っぜ…」

悔しそうな…しかし嬉しそうな顔の幽助

蛮鬼

「ぐふふ…今のが奥の手だったようだな」

幽助

「まあな」

蛮鬼

「ならば俺の必殺技も見せてやろつ…鬼道！」

蛮鬼が印を結び始める

幽助

「妖気が…集まる」

蛮鬼の両腕に妖気が集束していく

蛮鬼

「金剛拳！！」

一瞬にして蛮鬼の腕が何倍にも膨れ上がる

幽助

「…でけえ」

蛮鬼

「…ハア！！」

先程よりも速いスピードで蛮鬼が飛び出す

幽助

「ッ!!」

ボヒュッ

かろうじて避ける幽助、しかし風圧で体制が崩れる

蛮鬼

「隙ありあッ!!」

そこに蛮鬼の蹴りが入る

…ミシッ

ガードした幽助の腕が悲鳴を上げる

幽助

「…がッ…」

さらに蛮鬼の拳が襲ってくる

幽助

「…クソッ!」

グシャッ……

その瞬間、幽助の右腕は形を失った…

21・幽助VS蛮鬼? (後書き)

幽助負けちゃうかもねー…どうしょ

ん

22・幽助VS蛮鬼？

幽助

「ぐあああああああああ……！！」

幽助の右腕がただの肉と化す

蛮鬼

「グハハハハ！その程度か浦飯幽助！！」

響きわたる悲鳴を心地よさげに、蛮鬼が高笑いを上げる

幽助

「ハア……ハアッ！……ち……きしよ……」

膝をつき、かつて右腕があつた場所を押さえる幽助

そのとき、2人の闘いを記録していた機蟲『亞雲』が蛮鬼のもとへ戻ってきた

蛮鬼

「……どうやら記録が済んだようだ……」

そう言い『亞雲』を懷にしまう蛮鬼

幽助の周りは血の海と化している

幽助

「……ッ」

蛮鬼

「…テメエも用済みだよ浦飯幽助。まあほっときや死ぬがな」

グフフ…と蛮鬼

しかし幽助からの反応はない

蛮鬼

「……死んだか。さあて、次は桑原和真のデータを取らなきゃな」

蛮鬼は部屋を出ようとする…

深い意識のなか…幽助は夢を見ている…

????

「……………」が

…?

????

「この軟弱野郎が」

…なんだと？誰だコラ！

???

「こんなのが息子とは…我ながら情けねえぜ」

…親父？

雷禅

「気づいたかベビー」

…うつせえ

雷禅

「あんなヤツに負けるなんて…何考えてやがる」

…うるせえな、見ただろ？あのヤロー！霊丸も効かねえんだ…

雷禅

「だから諦めんのか」

…

雷禅

「テメエにはまだやる事が残ってんじゃねえのか？待ってるヤツがいるんじゃないのかよ」

…やる事…待ってる…ヤツ…？

雷禅

「チツ…果てしねえバカが。テメエはそんな事もわからず闘ってたのかよ？」

…わかんねえよ

雷禅

「それじゃあ負けて当然だよ…いいか？男はな、『目的』と『守るべきもの』がなけりゃ勝てやしねえんだ」

…そおいうテメエの守るべきものって…なんだよ

雷禅

「『仲間』だ」

…仲…間

雷禅

「生きている頃の俺は北神らを守るために闘ってきた。もちろん、テメエもな」

…仲間…か

仲間ならいるぜ…大事なヤローどもだ

雷禅

「…」

…桑原

…蔵馬

…飛影

…ぼたん

…コエンマ

…俺にはたくさん仲間がいる…

雷禅

「そつだ。そいつらを守りたい。そうだろ？」

…ああ

雷禅

「…テメエにやもったいねえが、最高の女神もついてるじゃねえか」

…女神？

????

「…幽助」

…蛍子

蛍子

「約束よ…必ず帰ってきて…」

…へっ…勝手に約束しやがって…仕方ねえ…守ってやるよ

雷禅

「テメエには『守るべき仲間』がたくさんいるんだ。それを忘れるな…」

…ああ！俺はまだ死ねない！

雷禅

「…雷禅様の親心だ。テメエの体を治してやるよ」

…んな事ができるのか？

雷禪

「…俺の魂と引き換えにな」

…魂…馬鹿言ってんじゃねえ！んな事したら生まれ変わりもできねえんだぞ！？

雷禪

「テメエに拒否権はねえよボケ。これから嫌でも一緒だ。仲良く行こうぜ」

…クソ親父

雷禪

「…ふ」

幽助の意識が戻っていく…

22・幽助VS蛮鬼？（後書き）

らいぜーん（T-T）

23・幽助VS蛮鬼？

幽助

「…待てよこら」

夢から覚めた幽助が蛮鬼を呼びとめる

蛮鬼

「…まだ生きてい……な、なんで腕が…」

蛮鬼が驚くのも無理はない。たった今潰したはずの幽助の右腕は、完全に元の形を取り戻していた

幽助

「…親父」

蘇った右腕を眺め、幽助は自分の気持ちを確かめる

幽助

「…俺の…『守りたいもの』…仲間……蛍子との約束…」

蛮鬼

「な…なにブツブツ言ってやがる！今度こそ潰してやるあ！！」

蛮鬼が再び印を結び始める

幽助

「…雷禅のチカラが…伝わってくる…」

蛮鬼

「…鬼道！金剛拳！！」

飛び出し、巨腕を突きだす蛮鬼

幽助

「…」

ブオン

空を切る音

蛮鬼

「…なに…？」

蛮鬼の巨腕をつかみ、静かに妖気を解放する幽助

ボギヤツ

蛮鬼

「ひぎやああああああああッ！！」

蛮鬼の右腕が蒸発する

蛮鬼

「…お…オオオオオア！！！！」

怒り狂った蛮鬼が左腕で殴りかかる

幽助

「…」おおお…」

ジユッ

蛮鬼

「あああああッ！」

幽助の体に触れたとたん、蛮鬼の左腕は消え去った

蛮鬼

「ば…バケモンが…！」

間合いを取る蛮鬼

幽助

「俺にはまだやる事がある。ここでテメエなんかじゃ負けてらんねーんだよ」

蛮鬼

「…こうなったら…見せてやるぜ！穿に貫った新たな能力！」

蛮鬼が妖気を集中し始める

幽助

「新たな能力？」

蛮鬼

「喰らえ！！鬼道…爆碎穿！！！」
ばくさいせん

蛮鬼の口から光の大砲が放たれる

幽助

「うおッ！」

うまく避けた幽助だったが、爆風により吹き飛ばされる

幽助

「……おいおい……冗談だろ……」

爆砕穿が当たった鋼鉄の壁はきれいに蒸発し、消え去っていた

蛮鬼

「死ねえええい！」

第2波を放つ蛮鬼

幽助

「……くそが！」

幽助は右手にチカラを集め……指先を爆砕穿に……そしてその先にいる蛮鬼へと向ける

幽助

「うおお……くらいやがれッ……」

その瞬間……幽助の全身に紋章が現れ、髪が伸び、妖力がはね上がった

幽助

「……霊・丸……！！」

明らかに今までの霊丸とは違う輝きを放った光の塊が撃ち出されるその光の玉は蛮鬼の爆砕穿を飲み込み、打ち消し……蛮鬼めざし進行

してくる

蛮鬼

「あああああああああああああ」

狂ったように爆砕穿を連発するが、光の玉の前には無力であった

蛮鬼

「いやだあああああああああああッッ!!」

ジュッ

蛮鬼は光のなかへ消えていった…

23・幽助VS蛮鬼？（後書き）

雷禅最強！（‘o’）

24・桑原VS穿

霊丸を撃ち終わると、幽助の髪は元の長さへ抜け落ち…体の紋章も消えていった

幽助

「一瞬…親父とひとつになった感じがした…」

どこか嬉しそうに、幽助は洞窟を後にした…

そのころ…

断首台の丘

桑原

「…ちッ」

穿

「おかえりなさい」

次元刀による脱出に成功した桑原たちだったが、幽助と桑原を探していた穿と鉢合わせてしまっていた

ぼたん

「こんなときに…」

穿

「おや？浦飯幽助はどうしました？…そうですか、ひとり置いてきたのですね」

桑原

「いまごろテメエの仲間はある世に向かってんぜ」

穿

「クックク…私に仲間などいませんし必要ありませんよ」

飛影

「…」

穿はおったマントから小型の機械を取り出し…放り投げる

穿

「さあ、桑原和真…データを採取させて貰いますよ」

その機械はみるみるうちにデータ採取機蟲『亞雲』へ変化していく

桑原

「…やってやらあ！後悔してもしらねえぞ」

桑原が前に出る

蔵馬

「…確かに現状でまともに闘えるのは桑原君だけだ…しかし…」

蔵馬はなにやらぼたんに耳打ちする

ぼたん

「任せな」

そう言うと、てのひらに靈氣を集め、蔵馬と飛影の治療を始めるぼたん

蔵馬

「耐えてくれ…桑原君…」

桑原

「うらぁッ！」

靈剣を穿めがけ振り降ろす

穿

「クク…」

穿は右手を剣の腹に当て、軌道をそらした

桑原

「…ツちい！」

隙だらけの桑原めがけ、穿の肘がクリーンヒットする

桑原

「…がッ…」

鈍い音をたてて、桑原が倒れこむ

蔵馬

「桑原君！」

飛影

「…バカが。油断しやがって」

ぼたん

「…」

ぼたんは全霊気を両の掌にこめ、治療を続けている

穿

「…ふむ」

穿は上方の『亞雲』を見上げ

穿

「桑原君、お願いだから本気を出してくださいませんか」

桑原

「…な、んだとコラ…」

頭をぶんぶん振りながら立ち上がる桑原

穿

「全てのチカラを出してくれないと困りますよ。私には正確なデータを必要なのでね」

感情のない眼で淡々と話す穿

桑原

「…」のやろお！」

両手に霊剣を持ち、再び斬りかかる

が…

穿

「それはもういいですよ」

とびかかる桑原に向け右手をかざす穿

すると

桑原

「！！」

穿の掌から衝撃波が放たれ、桑原を吹き飛ばす

桑原

「ぐあッ！」

数メートル先の地面に叩きつけられる桑原

穿

「わからない人ですね。私が欲しいのは貴方の最強の技ですよ」

蔵馬

「…次元刀か」

飛影

「アイツは次元刀を自在に使いこなせるのか？」

蔵馬

「…いえ。長いこと平和な人間界で暮らしていた桑原君です。おそらく…」

飛影

「ちつ。平和ボケが」

不機嫌そうに飛影

その隣ではぼたんが必死の治療を続けている

桑原

「…見せてやんぜ！桑原和真様の十八番！」

霊気を放ち次元刀を作り出す

穿

「…ほう」

予想外の霊気に感心する穿

桑原

「…見ていてください…雪菜さんッ！！」

飛影

「…」

愛の戦士・桑原和真が立ち上がる…

24・桑原VS穿（後書き）

愛の戦士（笑）

25・極・次元刀

桑原

「うりゃあッ！」

穿

「無駄ですよ」

振り降ろした次元刀は、またも軌道をそらされる

穿

「…この程度ですか…」

桑原

「…ち…」

瞬間、再び桑原が吹き飛ぶ

穿

「その剣は飾りですか？ただ振るだけなら誰にでもできるのですよ」

地面に叩きつけられる桑原

穿

「貴方には失望しました…。もういいです」

そう言い『亞雲』を回収する穿

飛影

「…ち」

蔵馬

「桑原君…」

穿

「さて、浦飯幽助のもとに向かいますか」

蔵馬

「ま、待て！」

飛影

「逃げるのか貴様」

未だ治療中の2人がとびかかろうと構える

穿

「逃げる？…クク、今の貴方たちになにが出来ますか。体力だけは回復したようですが…妖力が空ではないですか」

蔵馬

「…クツ…」

ぼたんの治療により、体力だけは即座に回復していた2人だったが、肝心の妖気を溜めるのにてこずっていた。

妖力の自然回復に加え、ぼたんのから送られる靈気を体内で妖力に変換・吸収しなければいけないのだ。本来ならば、ぼたん一人ではとてもではないが足りないのである

穿

「そこのお嬢さんも限界のようですよ…クク…」

そのとき、蔵馬と飛影の後ろで回復を続けていたぼたんが崩れ落ちた

蔵馬

「ぼたん！」

飛影

「…妖気など必要ない。貴様程度の相手…刀ひとつで充分だ」

飛影が構える

桑原

「…待てよ…」

飛影

「！」

穿

「…」

そのとき、倒れていた桑原が立ち上がった

桑原

「…テメエの相手は俺だろうが！」

穿

「ふ…今更貴方になにができます？」

クツクツクツ…と穿

飛影

「そつだ。死ぬぞ」

桑原

「うるせえあ！あいにく俺はなあ…諦めがわりいんだよ！」

次元刀を手に持ち、突進してくる桑原

飛影

「バカが」

穿

「バカバカしい」

呆れた穿が後方へ逃れる。次元刀は空を斬る

穿

「…フ」

穿が衝撃波を出そうと手を出した瞬間

穿

「ぎいやあああああああああッ！」

穿の右腕が身体から斬りはなされた

飛影

「！？」

蔵馬

「まさか…桑原君」

穿の体からは大量の血が噴き出している

蔵馬

「……次元刀を…極めたのか…」

25・極・次元刀（後書き）

桑原最高

飛影

「次元刀を極めただと？」

蔵馬

「ああ、次元刀の本来の能力は『次元を斬る』ことだ。今までの桑原君は単純に『空間を斬り、他の場所へ移動する手段』として次元刀を使っていた。だから攻撃方法は霊剣と同じ、ただ斬りかかるだけ」

飛影

「ああ。それが極めるとどうなる？」

蔵馬

「『次元を斬る』ということはつまり…なんにも刀そのものを敵に当てなくても次元を越えて斬る事が可能ということだ」

飛影

「…なるほどな。つまり離れた場所からでも斬ることができるということか」

蔵馬

「ああ。この闘い…桑原君の勝ちだ」

桑原

「…なんだ？なんで当たってねえのに斬れたんだ？」

自分が次元刀を極めた事に気付いていない桑原

穿

「ぐ…き、さまあああ！まだそんな能力を隠し持っていたのかッ！」

右腕を失い、完全に冷静さをうしなった様子の穿

桑原

「？まあいいか…覚悟しやがれ！」

桑原が次元刀を振り回す

穿

「…ひ…!!」

その瞬間、穿の体におびただしい量の斬撃が入る

穿

「ああああああああああああッ!!!!」

むごい程斬りつけられた穿が叫びをあげる

飛影

「…ちっ…」

いい所を取られ不機嫌に舌打ちをする飛影

桑原

「俺って…強い？」

くるつと蔵馬の方を見る桑原。その目はランランと輝いている

蔵馬

「…はは…」

苦笑する蔵馬

飛影

「バカが」

その時、桑原の隙をついた穿が、どこからか『メス』を取りだし、桑原を斬りつけた

桑原

「…ッ痛う！…のヤロお！」

穿の顔面に渾身の一撃を喰らわせる

穿

「…ひ…ひひひひひひひ…もう終わりだ…ひゃはははは」

狂ったように笑い続ける穿

桑原

「なにがだコノヤロー。今トドメを……」

その瞬間、桑原の動きが止まる…

蔵馬

「…………桑原…君？」

飛影の脳裏に跳の言葉が蘇る

『穿のメスを喰らったら…終わり』

桑原はガクガクと震えはじめ、やがて血を吐き…倒れこんだ

27・探索

蔵馬

「桑原君ッ!!」

倒れたまま、ピクリとも動かない桑原に駆け寄る蔵馬

飛影

「貴様あッ!!」

飛影が穿に斬りつける
穿

「……ぐあ……」

穿の体はまっ2つに切り裂かれた

蔵馬

「…これは…魔害樹の毒かッ!」

飛影

「…毒」

そのときぼたんが目をさまし、桑原を発見した

ぼたん

「桑原君ッ!!…どいとくれ!!」

蔵馬をどかし、動かない桑原に靈気を当てるぼたん

ぼたん

「なんの毒か知らないけど…進行を遅らせること位はできるハズだよ…」

蔵馬・飛影の治療により、ぼたんの霊力は底をついていた

蔵馬

「いけない！貴方にはもう霊力が…」

ぼたんは霊力の不足分を、自らの命で補っていた

ぼたん

「…数時間は耐えてみせるよ」

汗をびっしりかきつつも、霊気の放出を辞めないぼたん

飛影

「蔵馬」

蔵馬

「…なんだ？」

飛影

「魔害樹の解毒はできないのか？」

蔵馬

「…毒を持つてるということは、おそらく何処かに血清を隠している筈だ」

飛影

「処刑人の洞窟か」

蔵馬

「ああ、急ごう」

桑原とぼたんを残し、2人は洞窟へと戻っていった…

走り出して数分後。幽助と鉢合わせし、桑原とぼたんの元へ向かわせた

幽助

「あいつらの事は任せろ」

そう言った幽助からは、かつてない程の強さと優しさを感じた

処刑人の洞窟

飛影

「ち。どこがヤツの部屋なんだ」

蔵馬

「二手に別れよう」

返事もせず洞窟の奥へと消えていく飛影

蔵馬

「…さて」

飛影に続き、蔵馬は洞窟の奥へと足を進めていった…

飛影は洞窟の他のところには目もくれず、最深部を目指していた

先程から洞窟奥より流れてくる奇妙な妖気

飛影の頬を汗がつたう

飛影

「！」

洞窟が急に狭くなり、ヒト1人がようやく通れるほどの通路が続いている

飛影

「…」

通路をしばらく進むと、急に開けた場所に出た。向こうには大きな扉が見える

飛影

「…」

飛影が感じた奇妙な妖気が、扉の向こうから流れでる

????

「なにか用かの？」

飛影

「！」

いつの間にか飛影の隣には、小柄な老人が立っていた

飛影

「……この先にはなにがある？」

老人に訪ねる飛影

老人

「この扉の向こうには…穿という妖怪により生み出された最強の兵士、その試作品が眠っておる」

飛影

「貴様、穿の仲間だな」

老人

「ほっほ…まったく最近の若いもんは礼儀を知らんのう…」

フ…と老人が消え、扉の前に腰かける

飛影

「…」

老人

「まあいいわい。ワシの名は虚空^{こくう}。この先に眠るモノの番人じゃ」

飛影

「虚空…？闘神・虚空か！」

虚空

「ほっほっほ、まだその名を知っておるもんがおったか…」

飛影

「強さを求める者なら誰でも知ってるぜ。広大な魔界においても、最強の種族『闘神』。現存する最古の闘神・虚空。俺の仲間には闘神・雷禅の息子がいるぜ」

虚空

「雷禅か…懐かしい名じゃ…風の噂で死んだと聞いたが、まさかせがれがおったとはのお」

昔を思い返すように空を見つめる老人

虚空

「……この先へは行かせんよ」

飛影

「なぜだ」

扉に歩み寄る飛影

虚空

「ここに眠るモノは既に生き物ではない。完全な戦闘兵器じゃ…それ故ワシが封じておるのじゃ」

飛影

「それを今から消そうというんだ」

飛影が扉を開けようと手をかけたその時

虚空の蹴りが飛影の腹へ入る

飛影

「……が…」

虚空

「どうしてもこの先へ行くというのなら…お主の『つよさ』を見せてみよ」

虚空が構え…飛影も構える

飛影

「チッ」

28・蔵馬VS戸愚呂

2人は睨みあったまま動かない

飛影

「…シッ」

飛影が消える

一瞬にして虚空の後ろをとり斬りかかる

虚空

「…若僧が!」

虚空の体が空へ浮き、バック転の形で飛影の後ろに着地する

飛影

「…な」

虚空の拳が飛影の体をえぐる

飛影

「…ぐあッ!」

あまりの衝撃に吹き飛ばされる飛影

虚空

「まだまだじゃのう。その程度の力では大事な仲間すら守れぬぞい」

飛影

「なか…ま」

飛影は本来の目的を思い出す。

飛影

「ちっ…」

立ち上がり、パンパンとホコリを払い

飛影

「用事を思い出した。また来る」

そう言い引きかえしていく飛影を、笑顔で見送る老人

虚空

「ほっほ…」

狭い通路を歩きながら、飛影は自分の愚行を後悔した

扉の先のモノ…そこから流れてくる妖気にすっかり目的を忘れていた。

飛影

「…ちっ。どこにある…」

飛影は血清を求め、走り出した…

そのころ…

飛影とは別ルートを探索していた蔵馬

蔵馬

「そんなに広い洞窟ではないはずだ…もうしばらく耐えてくれよ…」
焦りを感じつつも洞窟を進んでいく

そのとき

蔵馬

「…出てこいよ」

暗闇に語りかける蔵馬

蔵馬

「この暗闇で貴様の妖気は酷く臭う…戸愚呂」

戸愚呂

「…ひひひ…待ってたぜえ？蔵馬あ！」

暗黒の壁から戸愚呂が出てくる

蔵馬

「…魔害樹の血清はどこだ」

冷やかな目で問う

戸愚呂

「ヒヤヒヤヒヤ！そうか、穿の毒にやられたか！どうせ桑原あたりだろう？…ひひ…」

愉快そうに高笑いする戸愚呂

蔵馬

「血清のありかを吐けば、今回は見逃してやる」

戸愚呂

「…血清は…ここだよ…ククク」

そう言い、試験管をチラつかせる戸愚呂

蔵馬

「よこせ」

戸愚呂

「やだね」

瞬間、蔵馬が薔薇の鞭を作り出す

戸愚呂

「ひひひ…妖力がほとんど感じられねえなあ？蔵馬ああ！」

戸愚呂の右指が伸びる

蔵馬

「貴様を殺すには十分な量だ」

襲いくる右手を鞭でいなす蔵馬

戸愚呂

「うるせあッ！あの入魔洞窟での恨み！テメエの体に叩き込んでやらあッ！！」

そう叫ぶ戸愚呂の体が見るみる内に針だらけになる

蔵馬

「自分で蒔いた種だろう？」

そう言い、蔵馬が構える

戸愚呂

「黙れ黙れ黙れえッ！穿により解放された俺の心にはなあ…テメエへの復讐心しかなかったぜ！！」

針状の体で突進してくる戸愚呂

蔵馬

「もう眠れ！戸愚呂おッ！！」

蔵馬の鞭が槍のように直線状になり、戸愚呂めがけ飛ぶ

戸愚呂

「…ッ！！」

肉が潰れる音と共に、薔薇の鞭が戸愚呂の顔面を貫く

戸愚呂

「…オゴあッ！」

蔵馬

「……」

顔面から鞭を抜くと、戸愚呂の体が崩れ落ちる……

29・復讐の最期

倒れてこんだ戸愚呂の体を探る蔵馬

蔵馬

「…これか」

試験管を取り出し、二オイをかぎ、中身確かめる

蔵馬

「…よし、急ごう」

蔵馬が去ろうと背を向けた…その時

戸愚呂

「やっぱりテメエは甘チャンだぜええッ！」

再生を果たした戸愚呂が蔵馬にとびかかる

蔵馬

「……根を張れ」

瞬間、戸愚呂の動きが止まる

戸愚呂

「…が…テメエ…なにをしゃがった…」

苦しそうに戸愚呂

蔵馬

「貴様があの程度で死ぬとは誰も思っ
てないさ…試験管を取り出し
た時に『種』を植えさせてもらっ
た」

戸愚呂

「……な…にい…」

戸愚呂の体がビキビキと音をたてる

蔵馬

「植えた植物は『呪縛草』。貴様の体には呪縛草の根が張り巡らさ
れた…あとは…」

戸愚呂

「…や、やめてくれ…。も…もとは言えば穿の野郎が持ち出した
話なんだよ…な？俺は悪くねえ…全部穿が悪いんだ。だから助けて
くれよ？」

蔵馬

「……」

戸愚呂に近付く蔵馬

戸愚呂

「助けてくれよ…蔵馬ああッ!!」

近付いてきた蔵馬を戸愚呂の針が襲う

しかし、それを鞭で斬り払う蔵馬

戸愚呂

「…ひ！」

蔵馬

「……咲け」

ボンッ

破裂音と共に戸愚呂の体が引き裂かれ、体内から植物が溢れだす

戸愚呂

「ひぎゃあああああああああああッ！！！」

植物はバラバラになった戸愚呂を巻き込み、その場に根を張り、花を咲かせる

蔵馬

「…感謝するぜ戸愚呂…お前の醜い心が、こんなに綺麗な花を咲かせてくれた」

そう言い残し、蔵馬は去る

あとに残るは一輪の美しい花……

30・魔人

飛影と蔵馬が洞窟を去ったあと、処刑人の洞窟に入るひとつの影があった

穿

「ククク…まだだ…まだ私の計画は終わってなどいない…」

半身だけの穿がズリズリ音をたてながら這っていく

穿

「…ここまで来れば…」

そう言いどこからリモコンのようなモノを取り出す

穿

「ククク…私が…魔界の…支配者に！」

ピッ

リモコンのスイッチが押される

コトコトコト...

大地が震えはじめる

洞窟最深部では…

虚空

「…穿め…遠隔操作器を造りおったか…」

虚空の後ろで、巨大なトビラがミシミシと音をたて、破壊されていく

虚空

「…目覚めおったわい」

壊れかけたトビラを突き破り、巨大な腕が現れる

虚空

「…化け物め！」

トビラが完全に壊れると同時に、洞窟の崩壊が始まる

虚空

「ぬう…」

崩壊により次々と落ちてくる岩石をかわしながら洞窟を脱出する老人…その視線は常に魔人を見据えていた

そのころ…

蔵馬

「…これで大丈夫だ」

桑原に血清を与え、とりあえずの目的を達成した一同

幽助

「とりあえず一安心だな」

ぼたん

「ふう…さすがのアタシも疲れたよ…」

飛影

「ふん。世話のかかるヤツだ」

そう言い、どこかへ行こうとする飛影

ぼたん

「おや？どこに行くつもりだい？」

ぼたんがそれに気付く

飛影

「……用事があるからな」

蔵馬

「……」

ゾクッ

幽助

「……なんだ……この妖気は……」

蔵馬

「……妙な感じの妖気だ……」

飛影

「これは……」

ぼたん

「知ってるのかい？」

その場にいた全ての者が震えあがる程の妖気が満ちていく……

飛影

「……魔人……」

幽助

「魔人？」

???

「その通り」

声に反応し、後ろを振り返ると…そこには穿の半身があつた

穿

「…ククク…私を完全に消滅させなかった事を後悔するのですね…」

「

ニヤニヤとうすら笑いを浮かべながら、半身は話しを続ける

穿

「計画よりは十分早いですが…魔界を征服するには貴方達が一番の障害だと判断しました。私も贅沢は言つてられない状況なのでね…。試作兵を使わせて貰いますよ」

蔵馬

「試作兵？」

穿

「ええ。私がこれから造り出そうとしている改良型とは違い、私が試験的に産み出した制御不能の駄作ですよ。最も…その戦闘力だけは改良型を遥かに凌駕していますからね…」

ぼたん

「そんなのを放つて…アンタも無事では済まないだろ？」

穿

「くく…良いですよ。制御など出来ずとも…。私は悟りました。私の理想の魔界を手に入れるには…一度全てを破壊し、その上に創

造すれば良いとねえ！」

幽助

「狂ってやがる！」

穿

「ククク…ひひひ…ア—ッハッハッハ！」

ボンッ

飛影の炎により消え去る穿

飛影

「カスガ」

幽助

「おいぼたん！オメエは桑原連れて煙鬼のオッサンとこ行ってる！」

ぼたん

「あいよ。3人とも死ぬんじゃないよ！」

幽助

「ああ！」

蔵馬

「ええ」

飛影

「
…」

3人は処刑人の洞窟へと向かう…

31・虚空VS魔人

洞窟は跡形もなく崩れ去った

そこには一人の老人と…巨大な…不気味な『なにか』が立っている

虚空

「望まれずに生まれし魔人よ…哀しき魔人よ。この闘神・虚空が永遠の眠りにつかせてやろうぞ…」

虚空の前には、とにかく巨大…緑色の肌に所々に茶色い体毛を生やし、額には3本の角を生やした1つ目の魔人が立ちはだかる

魔人

「グロロロ…」

穿

「それは困りますねえ」

虚空の横から、穿の半身が語りかける

穿

「さあ！試作兵よ！本能に任せ全てを喰らい尽すのです！！」

虚空

「本能じゃと？あやつに本能などありやせんわい…お主が造りだし、破棄した産物なんじゃからのう」

穿

「…ククク…確かに、私はあの試作兵に本能や感情といった類のデータをインストールしていませんでしたねえ…しかしこの遠隔操作器の電波に乗せて、『命令』をやつの脳に焼き付ける事は可能なのですよ」

虚空

「…命令じゃと?」

穿

「ええ。ごくごく単純な『命令』ですよ…。『全てを破壊せよ』…それだけです」

虚空

「愚かな…」

虚空が消える、再び姿を現した時には穿の体は粉々の肉片と化していた

虚空

「…さて、こやつばかりはワシの力でも難しいのお…」
ため息をつき、構える老人

魔人

「グロロアアッ!」

虚空の殺気に触発された魔人が動き出す

虚空

「来い!哀しき魔人よ!」

魔人の眼が鋭く光る

虚空

「ムッ！」

ビッ

瞬間、魔人の眼から熱線が放たれる

素早い動きでそれを交す虚空

すかさず魔人の腕が襲いくる

虚空

「ぬっ……」

熱線をかわした状態から伸びてきた腕を足場にし、魔人の体を駆け登る

魔人の目の前へ跳び

虚空

「闘・龍・紋！」

虚空の体が一瞬光り、十字の焼け跡が魔人の眼球につく

魔人

「アギヤアアアアアッ！」

どうやら痛みは感じるらしく、激しく暴れる魔人

老人は更に追い討ちをかけるべく、再び魔人の体を登りだした

しかし

気づいた時には魔人の姿はなく、老人はひとり宙に浮いていた

虚空

「……な……」

刹那、老人の体に衝撃が走り、地面へ叩きつけられる

虚空

「……ガハッ！」

一体何が起こったのか理解できない闘神

老人が立ち上がったその時、信じられない光景があった

あの巨体からは想像がつかない程のスピードで周囲を駆け回る魔人

時には走り、時には遙か上空へと跳んでいる

虚空

「なんとという身軽さ……なんとというスピード……それにこのパワー」

老人は絶望した。力ではかなわなくても、スピードで覚乱し、隙をつき崩していけると確信していた……しかし、魔人の能力は老人のそ

れを全てにおいて上回っていたのである

魔人は立ち上がった虚空を発見すると

魔人

「グロロロアッ！」

自慢のスピードで襲ってくる。両の手を振り上げ、いつでも振り降るせるようにして…

虚空

「間に合わぬ！」

先程の一撃で、虚空の骨はほぼ全て砕けていた。本来ならば、立つことなど奇跡に近いダメージである。それでも立つことができたのは、闘神としての誇りとプライド…なによりも老人の根性に他ならないのである

ドンッ

魔人の両腕が虚空に振り落とされる…

32・最古の闘神

地面には魔人の腕が深く突き刺さっている

その横で、老人はかろうじて生きていた

虚空

「…速いのう…」

先程の攻撃を倒れこむような形で回避した老人だったが

虚空

「むう…あのスピードをどうにかせねばな」

この強大な魔人をどのように攻略するかを必死に考えていた

魔人

「グロロロ…」

地中深くえぐり込んだ両腕を引き抜いた魔人が、虚空を発見する

虚空

「まったく…眼を焼かれておるといふのによくもまあ…ワシの居場所がわかるもんじゃのう」

呆れたように、しかし感心したように呟く

魔人が再び両腕を振り上げる

虚空

「…ふう…」

魔人が腕を振り降ろすと同時に、老人が回転を始める

虚空

「ぬ…お・お・お・おおおおお!!」

その回転は、一瞬のうちに巨大な竜巻へと成長し、魔人の攻撃を迎え打つ

ガギャギャギャ

鋼鉄がぶつかり合うような音を出し、火花を散らせる腕と竜巻

バキンッ

わずかに竜巻の力が勝り、魔人の両腕が弾き飛ばされる

虚空

「今じゃア!!」

ババツと体を起こし、魔人の真下へと移動する老人

虚空

「喰らえい! 闘龍拳・回転気龍!!」

拳を天高くかざす虚空。すると拳が黄金に輝き…その光りがやがて黄金の龍となり回転を始める

魔人

「グギャアアアアッ！」

黄金の龍が、回転しながら魔人の両足を喰らっていく

魔人

「ガアアアアアアッ！！」

ミキミキと音をたてて魔人の足が潰れる

踏み潰されぬよう、イソイソと抜け出す虚空

轟音と共に崩れ落ちる魔人

しかし

虚空にはもう立ち上がる力がなかった

全身の骨という骨が砕け、その上黄金の龍を呼び出した事により更に体に負担をかけてしまっていた

ピクリとも動かない虚空の二オイを見つけた魔人が、大きく口を開け…エネルギーを集束していく

虚空

「…ここまでか」

爆音と共に虚空めがけ魔人の口からエネルギーの塊が撃ち出される

かつてないほどの爆発、爆音が鳴り響く…

煙が舞い上がり、
辺り一面を満たしていく…

33・刹那の炎たち？

徐々に煙が晴れていく…

虚空

「お主…」

虚空の前には黒髪の逆毛少年が立っていた

飛影

「貴様との勝負がまだだ」

虚空

「…バカモンが…」

幽助

「なんだなんだあ？まさか闘ってたのじいさんかよ」

蔵馬

「幽助。この方はご老体ながらオレ達より遥かに強者だよ」

老人の目の前には3人の『若僧』が立っていた

虚空

「…お主らのような若僧が敵う相手か…」

幽助

「あ？何言ってたじいさん…敵う敵わないじゃなくて勝たなきゃダメなんだろーが」

蔵馬

「…ふ」

飛影

「その通りだ」

そう言い、飛影が魔人めがけ飛び出す

虚空

「…バカモンどもが…ワシが援護する！遠慮せず暴れて見せよ！」

蔵馬

「ええ…闘神・虚空様。お話は飛影からうかがいましたよ。あなたの御力になれる事を誇りに思います」

そう言い、蔵馬も飛び出す

幽助

「親父の…雷禅と同族なんだってな。」

虚空

「…うむ。雷禅に闘いのノウハウを叩き込んだのはこのワシじゃ」

幽助

「…そうか。雷禅は死んだ。けどな…雷禅は生きてるぜ？…今は…俺と一緒にな！」

虚空

「ゆけい！雷禅の息子よ！雷禅の生きざま…見せてみよ！」

幽助

「…おう！」

幽助も駆け出す。

残る霊丸は…2発。

虚空により脚を潰され、動きの取れない魔人だったが、向かいくる
飛影・蔵馬・幽助を迎え撃つため…体中の砲台を開いていた

飛影

「…ちッ！」

無数の砲台から繰り出される無数のエネルギー弾を器用にかわしつつ、魔人の頭部に近づく飛影

しかしそのとき、魔人の口が大きく開いている事に気付いた

飛影

「…アレかッ！？」

ドンッ

再び轟音が鳴り響き、魔人の口からエネルギーの塊が撃ち出された

蔵馬

「飛影ッ！」

虚空

「小僧ッ！」

幽助

「……」

飛影

「……ふ。…俺をなめるなよ化け物。邪王炎殺黒龍波アアッ！」

飛影の右腕より暗黒の炎龍が喚び出される

ボンッ

爆音とともに黒龍はエネルギー弾を喰らい尽した

虚空

「…なるほどの…ワシを助けたのもあの炎龍か…たいした代物じゃないわい」

飛影

「ッはあッ！！」

燃え盛る剣を魔人の頭へと突き刺す

飛影

「おおおおッ!!」

突き刺した剣を通して、邪炎を魔人の体内へと送りこむ

魔人

「ぐぎやあああああつ!!」

決して消えない邪炎を体内に浴び、もがき苦しむ魔人

しかし

ピカアツ

魔人の角に激しい雷が轟き落ちる。それをモロに受けた飛影が吹き飛ばされる

飛影

「ガはッ」

34・刹那の炎たち？

宙へと投げ出される飛影…その体は雷により焼け焦げていた

虚空

「…………ぬん！」

虚空が念を凝らす、すると飛影のダメージが癒えていく

無事着地した飛影

飛影

「…なんだ？虚空の仕業か？」

蔵馬

「頼もしい援護なこと…」

蔵馬が前進を続ける。手には薔薇の鞭。蔵馬も飛影も、通常の半分程の妖力が戻っていた

魔人

「グロロロおッ！」

魔人の砲台から無数のエネルギー弾が発射される

蔵馬

「ッ！！」

激しい爆発

虚空

「むっ…」

飛影

「…ふん」

爆煙のなかから銀髪の妖狐が現れる

背中に浮遊樹を生やし…自由に空を駆け抜ける

蔵馬

「…ハアアッ！」

薔薇の鞭が生き物のように動き出し、魔人の砲台を次々と破壊していく

魔人

「グロロロおおッ！」

魔人の角が一瞬光る

蔵馬

「…!!」

カッ

瞬間、蔵馬の体を幾閃もの雷が突き抜る

蔵馬

「…ぐあぁッ！」

そのまま地面に叩き付けられる…そして

ドンッ

魔人の両腕が振り下ろされる

ドンッ

ドンッ

何度も蔵馬を叩き潰す魔人

幽助

「やめろおおおッ！」

飛影

「貴様あああッ！！！」

幽助と飛影がそれぞれ魔人めがけ『撃つ』

魔人

「！！！」

飛影の黒龍波が魔人の右腕に喰らいつく

魔人

「ぐぎゃああああああッ！！！」

幽助の真・霊丸が魔人の左腕を引きちぎる

魔人

「ウゴオオオオオオオッ!!」

幽助の髪は伸び、体には紋章が刻まれている

虚空

「ほう…やはり雷禅の息子か……」

その姿を見た虚空

虚空

「そっくりじゃわい」

魔人の腕に喰らいついた黒龍が、さらに力を増していき…喰いちぎる

魔人

「ゲロロロオオオオッ!!」

魔人の3つの角が怪しく輝く

すると無数の雷がまきおこり、すべてに襲いかかる

飛影

「チィッ!」

蔵馬

「クッ!」

幽助

「うおッ!」

それぞれかろうじて雷をかわすが、避けるのに精一杯で全く攻撃に入れない

虚空

「ぬうつん…！」

虚空が全妖力を開放する

すると…幽助ら3人の体を薄い膜が包みこむ

幽助

「…じいさん」

飛影

「…余計なことを」

蔵馬

「…ふ…」

虚空

「その膜がある限りはあやつの雷なぞ無力じゃわい！」

幽助

「やるなじいさんっ！…決めるぜ皆あッ！…」

蔵馬

「ええ。この闘い…終わらせましょう！」

飛影

「…ふん。トドメは俺が刺す！」

魔人

35・刹那の炎たち？

魔人の雷は次々と幽助たちを襲う。

しかし、虚空の膜によりその全てが無力化される

幽助

「こりゃあスゲーぜ！」

蔵馬

「さすがは闘神。妖力も桁違いですね」

飛影

「…ちっ」

魔人が大きく口を開く

飛影

「……くるぞ！」

蔵馬

「任せろ。2人は攻撃直後を狙ってくれ」

幽助

「ああ！頼むぜ？蔵馬」

右手に全妖力を集束する幽助

飛影

「一撃で決める」

黒龍を喰らう飛影

魔人

「グロオオオオアアアッ！！！」

最大級のエネルギー弾が放たれる

蔵馬

「うおおおおおッ！！」

全妖気を解き放つ蔵馬

エネルギー弾が幽助たちに近づく

蔵馬

「喚樹！…改良妖壁樹！！」

どこからか巨大な『壁』状の植物が現れ、エネルギー弾をその身に受ける

蔵馬

「耐えろおおッ！！」

ビキッ…

蔵馬

「…ぐっ…」

『壁』の植物にヒビが入る

蔵馬

「…あああああああつ！！」

植物の『壁』の後方に、新たに妖壁樹が現れる

エネルギー弾が消えた

ほぼ同時に蔵馬の体が南野秀一に戻る

幽助

「蔵馬！」

蔵馬

「…平気だ…妖力を…限界以上に使用した反動だ…」

飛影

「……幽助！決めるぞ！！」

幽助

「！……ああ」

再びエネルギーを集め始める魔人

飛影

「させるかああああッ!!」

『蔵馬が命がけでつくってくれたチャンス』

飛影

「…無駄にはできん!! 喰らええ!! 邪王炎殺……黒龍波ああああッ!!」

轟音とともに最強の黒龍が放たれる

幽助

「…雷禅…。守ってみせるぜ…仲間を、…蛍子との約束を!!」

『…ふ…かましてやれや。バカ息子!』

幽助

「……へっ!行くぜクソ親父いあ!!…くらいやがれっ!!…霊・丸んッ!!…!!」

爆音とともに、最強の霊丸が撃ち出される

全妖力をこめた黒龍と霊丸

魔人

「グロロロオオオオオオオオオッ!!」

…カッ

一筋の光が魔人を貫く

魔人

「……………」

虚空

「見事なり!」

ドオオオン…

魔人の頭は吹き飛び、体が崩れ落ちる…

幽助

「…や…やったぜ！」

飛影

「…ふん」

蔵馬

「魔人は…滅んだ…」

こうして最凶の魔人は消滅し…穿の野望は失敗に終わり、戸愚呂の復讐も達成されることなく…幽助らにより終わりを告げたのである

35・刹那の炎たち？（後書き）

長かった幽助たちの話も次回でラスト…長かった…本当に長かった…
…もう感想は長かったしかでてこない…
ラスト。頑張ります！

Last・『刹那の炎』

虚空

「では。な」

幽助

「ああ…長生きしろよ。じいさん」

虚空

「ふん。若僧が」

あの闘いから3日間、幽助・飛影・蔵馬…あと虚空は眠り続けた。4人とも妖気の使用量が限界を突破していたらしい…倒した魔人の側で眠っている4人を救出したのは、こっそり魔界に来ていたコエンマであった

それから3日後。闘神・虚空は魔人監視の役目を終え、次の危険妖怪の封印場所へと旅立って行った。もちろん全身骨折のまま

幽助

「…なんだかんだあのじいさんが一番タフだな」

蔵馬

「ええ…本当に」

ケラケラと笑う2人

飛影

「ふん。」

桑原

「ん？おい飛影、どこ行くんだよ」

飛影

「……あのジジイとの手合わせがまだだ」

ぼたん

「……じいちゃん全身骨折でしょ」

飛影

「……！……ちっ」

蔵馬

「考えてなかったみたいですね」

飛影

「……ふん」

不機嫌そうにどこかへと消えていく飛影

桑原

「わかんねーヤローだ」

毒にやられた桑原だったが、血清を打たれた数時間後には完全に復活するという驚異の回復力をみせていた（無駄に）

コエンマ

「うむ。では帰るか！」

ぼたん

「帰ろうかねえ」

蔵馬

「帰りましょう」

桑原

「雪菜さんっ」

幽助

「ああ……帰ろうぜ」

隊長

「……では開きますよ。」

境界トンネルが口を開いていく……

幽助

「親父……雷禅。行くぜ……人間界に……蛍子との約束を守りによ！」

人の一生とは短く儚いものだ。

だからこそ人は人を思い…信頼し…愛する。『仲間』をつくる。大切な人と『約束』を交す。これらは時に激しく、強く燃え上がるものであり、時にたやすく消え去るものでもある。自分達人間は…この一瞬を生きる炎を守るため、たやすく消したりしないために生きていく…。この『刹那の炎』を守るため…生きていくのだ………。

T H E
E N D

L a s t ・『刹那の炎』（後書き）

あざーっした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7419a/>

幽遊白書～刹那の炎～

2010年10月10日02時03分発行